

今月のメッセージ (2014年7月)

日本銀行富山事務所長
佐子 裕厚

かたかこ 堅香子の花

5月半ばの週末、当地の知り合いの方々の山行に参加させていただきました。石川県と福井県の県境の山頂からは、残雪の残る白山が浮き立つように見え、石川県大聖寺町出身の深田久弥が若い頃に良く登ったという、笈ヶ岳(おいずるがだけ)、大笠山、荒島岳なども一望できました。

山頂付近に群生する片栗の花¹を観るのも目的でした。「初恋」を花言葉とするこの可憐な低草は、古くは「堅香子の花」と呼ばれていました。

もののふの ^{やそをとめ}八十娘子らが 汲みまがふ 寺井の上の 堅香子の花

大伴家持の歌です(万葉集所収巻19、4143)。大伴家持は天平18年(746年)に国守として越中に赴任しました。「もののふの…」の歌は、寺の井戸に集まって水を汲んでいる娘達の姿を片栗の花と重ね合わせたもので、越中の国府(家持の勤務先)近くで歌われたと言われています。

赴任の翌月には遠く離れた奈良の都で弟が急逝してしまいました。大病に掛かって療養生活を送ったこともありましたが、こうした中であっても、家持は越中の自然と風土に感銘を受け、223首もの歌を残しています。海、磯、立山の残雪、雪解け水、荒々しい川、降り積もる雪、春雨、月、梅、撫子、桃、李、萩、山橘……。いずれもが歌の題材になりました。

5年間の越中生活を終えて帰任する前夜、家持は歌います。

しなざかる ^{こし いつとせ}越に五年 住み住みて 立ち分かれまく 惜しき宵かも

都に帰った家持は動乱の権力闘争に巻き込まれ、没後に官籍から除名されるというドラマチックな人生を送ることになります。そんな家持にとって、越中での生活は、束の間の平穏な日々だったとも言えるのかもしれません。

7月1日付けで異動になり富山を離れることになりました。在任2年8か月。離れがたい気持ちで一杯です。これまで拙文をお読みいただき有難うございました。皆さまのご健康とご多幸をお祈りしつつ、筆を置かせていただきます。

以 上

¹ ユリ科。10センチ程の花茎の先端に6弁の薄紫色の花を1輪下向きに咲かせます。